

生涯学習だより

問 生涯学習推進課 生涯学習係
☎(83)7021

第1回町民大学の講演の一部

○日本は、国際交流、多文化交流の前に他者との交流が必要。関わりたいたいというマインドを持っていれば、現在の日本にはどこにでも原石が転がっている。ちよつと違った人に声をかける勇氣から、全てが始まる。

○国際交流は、3F(food,fashion,festival)と言われるが、その先に相互補完がある。東日本大震災でも能登の地震でも、外国人が炊き出しを行って被災者の支援をした。日本人も外国人も互いに関わりながら、共に補いつて、学び合うことが必要である。

○外国の人と関わることは、自分自身の視野を広げるとともに、地域を豊かにすることにつながっていく。



▲講師：かながわ国際交流財団
ジギャン・クマル・タパさん

ジギャンさんは、松田町の国際交流の立ち上げに携わっていただいた方。現在は、ネパール大使の通訳などで活躍中。



令和7年2月に開催した
桜祭りツアー

町では、2016年に「松田町国際交流ボランティアの会」が発足しました。

国際交流の視点から町の「これから」を考え、活動しています。「子どもたちのグローバル人材の育成」、「在住外国人の地域コミュニティの参画」、「インバウンド観光客に対する町の紹介」など、活動は多岐に渡ります。ボランティアの皆さんは、松田町の国際交流推進のためにさまざまな場面で活躍しています。

年齢、性別、国籍を超え、自由にコミュニケーションを取り、違い・個性をポジティブに受け止める活動はいつも笑顔であふれています。

松田文化財探訪

My二宮尊徳翁小伝 その4

文化財保護委員 草門 隆

尊徳翁の成果とその手法

翁の成果を端的に申せば、「江戸時代後期に飢饉などで苦しむ600の村々の窮民(貧民)救済・村再建を行った」と言われ、その手法は、「報徳思想・仕法」によるものです。報徳思想とは、翁の復興・再建のための理念・考え方で、仕法とは、報徳仕法のことで、その復興・再建のための具体的なやり方・実践方法のことです。

翁研究者の佐々井典比古は、わかりやすい言い方で、「翁は独創的で、自分の目で見えて考え、試さなければ、良本に書いてあつても真理とは認めず、そうして掴んだ原理や方法は、翁の実践力により功を奏した」と述べられています。

翁は「質素儉約と勤労」ばかりで、「村民を虐げた」などと言う人もいますが、そうではありません。筆者が最も心を惹かれた『報徳論』(富田高慶著)の中には、翁は、「まず藩主に仁政(思いやりの政治)を求めた」とあります。つまり、村民に内発的動機づけをしてやる気を高め、その結果として、村民に達成感を味わわせ、村民の生活に潤いを与えたからこそ、村の復興が成立したもので、成果は翁を信じ、自己を律して生活をした村民達のものと言えましよう。『報徳論』については、後の号にて詳述させていただきます。

今回は、熟慮し選んだ「報徳翁の教え」についての「12の重要キーワード」を紙幅の関係で筆者なりに平易・簡潔に記します。

写真の『報徳論』は、訳あつて発行部数が極めて少なく、超レア本となっているものです。



明治29年6月発行
『報徳論』(私蔵)